

学術調査報告書

2008年 6月 8日

(フリガナ)	ジョン ドンウォン	入学年度	2006年度
申請者名	全 東園	学年	2年

研究題目	朝鮮総督府博物館の「文化財」展示に関する実地調査
主任指導教員	野本 京子

(1) 学術調査の目的

現在、韓国には数多くの博物館が存在する。そのなかで、東京国立博物館のように韓国の中央博物館の役割を果たしているのは国立中央博物館である。現在の国立中央博物館の歴史は、日本が朝鮮を去った後の1945年12月3日から始まったとされているが、実際、その歴史は植民地期以前の大韓帝国期にまでさかのぼる。日本と同じく韓国の博物館も近代という大きな時代の始まりに生まれたのである。

日本の博物館の歴史は、明治のはじめ、西欧の万国博覧会を契機に始まったとされている。しかし、日本とは違って韓国の博物館は、日本の大陸への勢力拡張とともに、帝国日本によって作り上げられたのである。それで、国家と国民のアイデンティティの形成に重要な役割を果たしている博物館と、そこに展示される文化財は朝鮮人にとって無縁のものになってしまった。近代国民国家形成期における国の歴史の「物語」づくりを他者にゆだねるところに朝鮮の悲劇があったのである。まさに、韓国における博物館と文化財の誕生は帝国主義と植民地主義の交錯した副産物ともいえるだろう。

明治以来、日本での朝鮮に対する関心が高まるにつれ、磁器・仏像・絵画・工芸品などといった朝鮮のモノに関心を持つ人々も増えてきた。勿論、その関心は帝国主義の拡張という大きなカテゴリの中で起こった現象ではあるものの、朝鮮に対する情報の蒐集以外に、趣味や学問的な好奇心などを満たすための個人的な関心は着実に高まっていたのである。この個人コレクターらは朝鮮遺物に関する情報を集めるとともに、自らのルートを開拓してモノを手に入れてきた。

しかし、20世紀に入って日本帝国の大陸進出が本格化するにつれ、帝国大学を中心に侵

略を学問的に後押しする動きも出始めた。近代的な科学調査を掲げて朝鮮に渡った学者たちは多方面にのぼっているが、そのなかで東京・京都両帝大の歴史、考古、人類学者たちが朝鮮の遺物を本格的に研究し始めたのである。彼らは朝鮮史を新しく記述していく上で、特に朝鮮の文化的停滞性と日本との親近性を強調することによって朝鮮侵略を正当化しようとしたのである。このイデオロギー創出の作業に朝鮮の遺跡・遺物の調査は欠かせなかった。こうして、以前の個人コレクターの収集とは違う形で官学学者を中心とする、体系的な調査を通しての収集が開始されたのである。歴史を掌握するための調査は朝鮮全土を対象にしなければいけないうえに、そこには常に強力な植民地権力が付きまとっていた。

帝国大学の指示で朝鮮の遺物を調査した最初の人物は関野貞であった。東京帝国大学工科大学の助教授だった関野が海を渡ったのは1902年の初夏である。関野は、朝鮮に渡る際、学長の辰野金吾より「韓国建築ノ史的的研究ヲ以テシ且曰ク成ヘク広ク観察セヨ浅キヲ妨ケス」との指示を受けたという。これ以上、調査にいたる経緯は明らかになっていないが、1901年の第1次桂内閣の韓国保護国化の動きと、関野の韓国調査は何らかの関係があったと思われる。そして、1904年には朝鮮半島で日露戦争が勃発する。「なるべく広く浅く」観察して情報を収集する必要が帝国日本の上層部からすでに求められていたのである。

ともあれ、関野は調査の目的を報告書に「東洋の建築史を研究する上に於いて最必要にして興味あることなるへし」と建築史を中心に自分なりの意味づけをしていた。しかし、このとき関野の関心領域はすでに建築というカテゴリを超えて、朝鮮の歴史的な副産物である「文化財」まで広がっていた。そして調査の2年後に提出した『韓国建築調査報告書』（東京大学工科大学学術報告、第6号、1904年8月）には、東京帝国大学工科大学学長の命令に忠実に従うとともに自分の関心分野も広げて調査したことが記されていた。すなわち、第一篇には朝鮮の地勢、地質、気候、歴史、宗教、社会などの朝鮮社会の情報を「広く浅く」記録し、第2編には新羅時代から朝鮮に至るまでの歴史を建築以外の文化財をも含めて叙述したのである。この調査がきっかけになって関野貞は1909年にもう一度韓国の遺物調査を行うことになる。しかし、今回は帝大の命令ではなく、大韓帝国の囑託を受ける形となっていた。

1907年以来、統監府は大韓帝国の各行政機関へ次官を送り込んで朝鮮半島の実権を握っていた。1909年における関野の調査も名目上は韓国政府度支部建築所の委嘱という形を取っているものの、実は韓国の司法行政権を獲得した際の処理の一環として建築物の調査を依頼されたものであった。したがって、本当の調査の主体は1902年の調査となんら変わり

もないものであった。つまり、主体が帝国大学から統監府に移っただけで、依然として朝鮮人とは無関係のことであったのである。ともあれ、韓国政府度支部の次官荒井健太郎は、全国の諸官庁の建築物の新設とともに、旧官庁の解体あるいは改築の必要が生じたため、朝鮮の旧建築物の調査を建築所の工事顧問である妻木頼黄に依頼した。ここで妻木頼黄は1902年の朝鮮調査の経験があった関野貞を推薦したのである。

この際、関野は旧建築物の調査だけでなく古墳の発掘調査までも請願して度支部の許可を得ていた。朝鮮全土にわたる本格的な文化財調査が始まったのである。翌年、日韓併合とともに関野の調査は大韓帝国度支部から朝鮮総督府の事業として引き継がれることになるが、度支部の意図、つまり旧官庁の改築あるいは解体のための建築調査は完全に失われ、もっぱら文化財の調査と蒐集に重点を置く事業として位置づけられた。こうして、関野は東京帝国大出身の栗山俊一と京都帝国大出身の谷井濟一を補佐役として任命し、この3人を中心に朝鮮遺蹟の調査および発掘は1914年まで続けられる。

1915年9月11日、朝鮮総督府は日韓併合5周年を記念し、朝鮮半島における前代未聞の博覧会を開催する。朝鮮支配の正当性を内外にアピールすることが目的であるが、近代的な博覧会の模様は朝鮮の人々にとって初めての経験であり、規模面においても衝撃を与えるものであった。そして1909年以来、関野らの朝鮮古蹟調査を全面的にバックアップしてきた朝鮮総督府は、日韓併合5周年を記念する博覧会に古蹟調査で蒐集された朝鮮の文化財を展示する企画を立てた。現在の国立中央博物館の前身である朝鮮総督府博物館が誕生したのである。博覧会の場所が朝鮮時代の正宮である景福宮であったため、博物館も景福宮のなかに建てられた。現在は景福宮の復元計画によって博物館は移され、建物は壊されたが、植民地期を通じて朝鮮における中央博物館の役割を担ってきたことは紛れもないことである。その後、朝鮮総督府博物館を中心として朝鮮の歴史的な拠点に博物館が次々に立てられた。歴史的な拠点としての博物館には、新羅の古都慶州に朝鮮総督府博物館慶州分館、百済の古都扶余に同じく朝鮮総督府博物館扶余分館が立てられた。さらに、高句麗の古都平壤には平壤府立博物館、高麗の古都開城には開城府立博物館が建てられ、朝鮮全土にわたる博物館が完成したのである。

新羅と百済の拠点地域に朝鮮総督府博物館分館が建てられたことは興味深いことである。高句麗の遺跡地である平壤と高麗遺跡地である開城には朝鮮総督府博物館分館ではなく府立博物館が開館されたからである。これは朝鮮総督府が日本と直接関係があるだろうと思っていた新羅と百済の歴史を直接掌握する必要があったからであろう。日韓併合の正

当化のための親近性を強調するためにも慶州と扶余は重要な地域であった。一方、高句麗と高麗の拠点地域には停滞性が求められ、遺物の蒐集が中心行的に行われるとともに、その大部分は朝鮮総督府博物館に展示された。たとえば、平壤の付近では中国の楽浪文化を、開城付近では高麗磁器を中心に調査が進められその優秀性を浮き彫りにした。朝鮮の昔と現在を比較し、いまの停滞性を強調したのである。そのため、平壤と開城は地域有志たちの働きかけによって、総督府博物館分館ではなく府の博物館として誕生したのである。

そこで、今回の調査はソウルの朝鮮総督府博物館跡と国立中央博物館、慶州の朝鮮総督府博物館慶州分館跡と国立慶州博物館を中心に実地調査することにした。

植民地期、朝鮮における「文化財」に関する研究はすべて朝鮮総督府博物館を中心に行われたといっても過言ではない。したがって、朝鮮総督府博物館に関する研究は、植民地期朝鮮における文化財政策を明らかにする上で重要な意味を持っている。さらに、それは現在の韓国の博物館と文化財にもつながっているからである。以上の問題意識に基づき、朝鮮総督府博物館の歴史的意義及び性格を明らかにするのが本研究の目的である。

(2) 調査実施地および期間

本調査は、2008年3月4日から24日まで、韓国のソウル、慶州、大田において行ったものである。文献・資料の調査と実地踏査を同時に併行した。ソウルにおいては10日間、主に国会図書館と中央図書館で文献及び資料を調査・収集し、朝鮮時代の正宮である景福宮と国立中央博物館では実地調査を行うと同時に、写真撮影を実施した。

慶州においては7日間、植民地期調査が行われた地域を重点的に踏査し写真に収めるとともに、新旧博物館を訪れて聞き取り調査も実施した。大田においては3日間、政府の国家記録院を訪れ植民地期博物館文書の調査に時間を注いだ。

(3) 学術調査の具体的な実施内容

朝鮮総督府博物館に関する研究を進めるため、最初に取り掛かったのは、韓国においてなされてきた研究論文の収集であった。韓国国内で出版された90年代以降の関連雑誌（題目）を探して、そこに掲載されている論文を国会図書館と中央図書館でコピーした。さらに、国会図書館では韓国の大学における修論と博論の検索および閲覧が可能であったため、そのリストの作成とともに重要とされるものの一部をコピーしてきた。

次は、当時の記録の発見である。一次資料を捜すのはなかなか難しいことで閲覧を申請

するにも時間がかかるほか、文書を解読するにも大変苦勞した。さらに資料の保存状態が悪く、悪いものはコピーすることすら自由ではなかった。しかし、重要な資料は一週間で費やしてノートに映し出した。一次資料は朝鮮総督府関連文書と総督府博物館関係文書であるが、ソウルの国会図書館と大田の国家記録院で大部分を収集した。

最後に、自分が研究するためのフィールドとして現場を直接訪れて確認する必要があった。当時の人たちはどこで何を発掘し、またどこで何を展示したのだろうか。ソウルでは朝鮮総督府博物館があった場所、つまり景福宮を訪れ当時の雰囲気を感じた。昔の建物はすでになくなっており新しく景福宮の復元が行われていた。当時展示されていたものを確認するのは難しいが、朝鮮総督府博物館の庭に展示されていた石造物だけは国立中央博物館の庭に移転され飾られていた。当時の芸術認識をうかがえる上で重要な石造文化財ばかりである。写真に撮って記録したのはいうまでもない。

今回の現場の実地調査にもっとも力を入れたのが慶州であった。慶州ではまだ当時の博物館の建物が残っていた。博物館としては使われていないものの、当時の雰囲気を感じるには十分であった。1926年グスタフ皇太子が寄贈した木も立派に育っていた。現在は慶州文化院として利用されている。もちろん、市外に移転した慶州国立博物館の見学も実施した。さらに植民地期に一番調査が活発に行われた慶州南山に登り、所々にある文化財の痕跡を写真に収めた。

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

今回の学術調査では資料の収集と実地踏査を主な目的にした。現地で収集してきた当時の資料と論文などの分析は時間がかかりそうであるため、ここでは主に実地調査の結果で得られた成果を中心に書くことにする。そして、これから期待できる成果についても少し言及する。

まず、朝鮮総督博物館の誕生の背景から簡単に説明しておく。1915年朝鮮の京城（ソウル）で開かれた朝鮮物産共進会は国家規模で最初に開催された近代的な博覧会であった。朝鮮総督府は日韓併合5周年企画を機として朝鮮統治の成果を内外に知らせる計画を立案するが、この計画に博覧会を利用することにしたのである。

そして、博覧会の正式名称も「日韓併合5周年記念朝鮮物産共進会」と定められた。これは朝鮮の産業全般にわたる展示やアトラクションの設置などの規模の面からみても、明らかに「博覧会」と言うべきであるが、当時の朝鮮総督寺内正毅の指示で「共進会」とな

ったわけである。

ともあれ、この博覧会のテーマは朝鮮の近代化であった。朝鮮総督府は5年前の朝鮮と現在の朝鮮を比較・対照することで朝鮮の近代化を表そうとしていたのである。そこには未開な朝鮮が日本帝国の恩恵によって文明化されたことが明らかにならなくてはいけなかった。こうして、農業をはじめとする朝鮮産業の全般にかけて比較・対照の方法を巧みに利用し、物産を集めて展示したのである。

しかし、この博覧会の企画に合わない展示場が一箇所存在していた。後に朝鮮総督府博物館の前身になる美術館がそれである。なぜ、朝鮮総督府は朝鮮統治の実績を表わす博覧会に近代化とは逆方向に思える、朝鮮の文化財を展示しようとしたのであろうか。もちろん、博覧会に博物館が付きまとう関係であることは周知のことである。日本の場合も、万国博覧会の準備の傍ら博物館の設立が同時に進行したとされている。しかし、朝鮮の場合、世界に朝鮮文化の優秀性を誇示するために、あるいは朝鮮人のアイデンティティ形成のために、朝鮮総督府がわざと朝鮮文化財の収集・展示に取り掛かったとは考えにくい。

1909年以來続けてきた朝鮮古蹟調査事業で、朝鮮総督府は全国から収集されてきた朝鮮文化財の処理に腐心していた。発掘や調査によって収集された朝鮮の文化財は研究のためにいったん京城に運ばれ、景福宮の殿閣に臨時保管された。しかし、その量は日が経つにつれ段々膨らんできて新たに保管する場所が必要となったのである。そこで、朝鮮物産共進会を機に博物館を建てる計画をたてたのである。その発案は寺内正毅から出たとされているが、朝鮮に博物館建立を希望する声はすでに前から出回っていたのである。

1915年9月11日から同年10月31日にかけて開かれた博覧会のなかで、唯一美術館だけが恒久の石造建造物であった。もちろん、博覧会の終了後に博物館として利用するためである。この2階建ての美術館が、同年12月1日から朝鮮総督博物館として開館される。博覧会における美術館と朝鮮総督府博物館の展示に関しては、もっと詳細な分析が要される。

今回の調査で博覧会の展示物として美術館の前庭に飾られた石造文化財と、朝鮮総督府博物館開館以後も朝鮮各地から次々運ばれた石造物の一部が、国立中央博物館の庭に移され展示されていることを確認できたことは幸いであった。しかし、博覧会における美術館として建立され、後に植民地期を通じて朝鮮の中央博物館の役割を果たした朝鮮総督府博物館の建物は、残念ながら現在は残されていない。韓国政府による景福宮の復元計画とともに壊されてしまったのである。

1915年の博覧会における美術館建立以来、その庭園に飾られた朝鮮各地の石造物の全貌

はまだ解明されていない。朝鮮総督府博物館の管轄に移ってから各地の石造文化財は次々運ばれたが、その正確な数とモノはまだ明らかになっていないのである。たとえば、1915年の博覧会のときには景福宮の庭にあった利川郷校傍石塔が、その後東京の大倉集古館に移されたように、当時の記録には残っているものがどこかに移されたと考えられるものが多いからである。しかも、その大半はいまだに所在不明である。

国立中央博物館の移転の際、景福宮の石造文化財は法泉寺智光國師玄妙塔を除いて、すべて運ばれた。国立中央博物館の庭に移し、展示されている石造文化財は以下のとおりである。

(表) 国立中央博物館の庭にある石造文化財

名称	時代	発見地	国宝	移された時期
弘濟洞五層石塔	高麗 (11世紀)	ソウル	宝物 166号	1969年
令傳寺普濟尊者舍利塔	高麗 (14世紀)	江原道 原州	宝物 358号	1915年
安興寺五層石塔	統一新羅末、高麗初 (10世紀)	京畿道 利川	非指定	1915年
泉水寺三層石塔	高麗	江原道 原州	非指定	不明
泉水寺五層石塔	高麗	江原道 原州	非指定	不明
葛項寺東西三層石塔	統一新羅 (8世紀)	慶北 金泉	国宝 99号	1916年
南溪院七層石塔	高麗 (11世紀)	京畿 開城	国宝 100号	1915年
石造佛立像	高麗 (10-11世紀)	不明	非指定	不明
長明燈	朝鮮	不明	非指定	不明
文人石	朝鮮	不明	非指定	不明
石羊	朝鮮	不明	非指定	不明
溫寧君石槨	朝鮮	京畿道 楊州	非指定	不明
景福宮に残った石造物				
法泉寺智光國師玄妙塔	高麗 (11世紀)	江原道 原州	国宝 101号	1915年

弘濟洞五層石塔は朝鮮古蹟調査のうち、最も早い段階である1902年の関野の調査によって世に知られたものである。景福宮と同じく京城にあったため運ばなかったのだろうか。この石塔が景福宮の国立博物館区域に移されたのは1969年になってからである。そのほか、

ほとんどの石塔は1915年の朝鮮総督府博物館の設立の際に運ばれ始めたのである。

上の表でわかるように、それらは現在韓国の国宝や宝物に指定されているものもあれば、指定されていないものもある。日本人学者が調査・研究し、その発見場所などを記録に残したものは、後に研究が進められ歴史的な根拠などが追加的に解明されていく。

記録に残っているものは、当時の日本人学者たちによる評価が高くつけられたものが多い。しかし、学者たちの調査が進んでいくにつれ、報告書や論文などが古蹟調査の成果として世に広がっていく。これが朝鮮文化財の乱獲を招く結果を生み出す原因の一つになる。そこに古蹟調査と関係のない朝鮮総督府の各部署も文化財の蒐集に熱を上げたのである。朝鮮物産共進会の庭を担当した総督府職員が、どのような面を高く評価したうえで、石造文化財を京城に運んできたのかはもっと詳しい検証が必要である。しかし、発見場所などの記録すらしない、無作為な方法での蒐集は後に当該文化財の価値を定めるのに大きな障害を与えたのである。そこに朝鮮古蹟調査を行った日本人学者の功過が問われる。

ともあれ、当時学者たちによって高く評価された朝鮮文化財は、1945年8月15日以降の韓国にも引き継がれ国宝ないし宝物として指定されるにいたる。要するに、当時の植民地権力側の文化財に対する視線は韓国につながり、植民地期の文化財は60年代の国宝・宝物の指定とともに韓国的な視線に変わってしまったのである。

次は、朝鮮総督府博物館慶州分館について触れてみよう。慶尚南道に属する慶州は新羅千年の都で、日本の奈良に匹敵するほど文化財が散在している地域である。関野貞は、1902年の最初の調査から慶州の新羅文化財を見逃さなかった。そのため文化財に対する認識が慶州の人々に広く伝えられたのだろうか、この地域での文化財保護の動きは割りと早い段階で起こった。1913年には地域の日韓有志たちによる慶州古蹟保存会が活動を開始するとともに、旧官営の客舎を利用して展示館を整えた。そして1921年から1926年にかけて金冠塚や瑞鳳塚などの世界の注目を浴びる陵墓が発見されたことを契機に、以前からの展示館として利用してきた旧官営を朝鮮総督府博物館慶州分館として昇格させたのである。こうして朝鮮における二番目の博物館が慶州を拠点に新羅の歴史を語り始めたのである。ところが、現在は新羅の都と知られる慶州であるが、当時の日本人が関心を持ったのは、神功皇后や豊臣秀吉などとの関係であった。要するに、日本との親近性の証左を探すため、慶州に興味を持ち始めたのである。

ともあれ、今回の調査で慶州を訪れたとき、朝鮮総督府博物館慶州分館は慶州文化院として運用されていた。すべての文化財は新しく建設された国立慶州博物館に移されたが、

いくつかの残影が残っていて当時の歴史を伝えてくれている。正門を通過して左側には、国宝第 29 号の聖徳大王神鐘があった場所を知らせる碑石だけが残されている。碑文の前後には「宝物第 99 号慶州聖徳王神鐘」と「朝鮮総督府」という文字が刻まれている。植民権力によって宝物と指定されていた聖徳王神鐘は、解放後、その反動からか国宝に昇格されるとともに、名称も聖徳大王神鐘と変えられた。解放後の歴史空間において植民地期に作られた歴史を克服しようとする動きが見えてくる。植民地期の歴史を克服するための最も強力なナショナリズムが解放後の朝鮮半島には求められていたのである。

また、庭の真ん中にはスウェーデンの皇太子グスタフ 6 世が訪問したときに、記念植樹した樅もそのまま残されていた。1926 年に慶州で新しい陵墓が偶然発見されて内外から大きな話題を呼び起こしたが、この発掘調査に考古学者であるグスタフ皇太子も参加したのである。それを記念して慶州分館にはグスタフ皇太子による記念樹が植えられ、朝鮮総督府はその陵墓を^{スウェーデン}瑞典の頭文字をつけて「瑞鳳塚」と名付けしたのである。

以上のような調査を踏まえると、植民地期における朝鮮の文化財と博物館の背景には、三つの特徴が互いに絡み合っているのではないかと思われる。

一つ目は、朝鮮の文化財及び博物館は日本帝国主義の拡張とともに浮かび上がったことである。日清戦争の時期には戦利品の獲得や盗掘の対象であった朝鮮の文化財が、日露戦争後には朝鮮史を後押しするために調査・利用され始めた。そのため、朝鮮全道の歴史的な拠点を中心に計画的な調査を行い、そこで得た朝鮮文化財は後日詳細な研究を行うために京城や日本に運ばれたのである。この朝鮮各地から蒐集された文化財が相当数に上るにつれ必然的に博物館の必要性が台頭した。むしろ、その調査と蒐集の主体は、帝国大学の学者と朝鮮総督府であった。

二つ目は、植民主義の強要である。日本帝国から見れば、朝鮮の文化財を博物館に展示することは大変危険なことである。ともすれば朝鮮人に朝鮮のナショナリティーを植えつける可能性が高いからである。そのため、朝鮮文化財の調査と博物館の展示には徹底的に朝鮮人を排除した。そして朝鮮の歴史を作るのに重要なポイントである親近性と停滞性は、博物館の展示にも極力利用されたのである。それは植民地期を通じて一度も変わったことのないプロパガンダであった。

三つ目は、近代性の導入である。文化財や博物館自体が近代の象徴的な副産物でもある。さらに、帝国大学の学者たちは、西欧で学んだ考古学知識を朝鮮半島で遺憾なく発揮した。日本の考古学調査には様々な制約がついているのに比べて、朝鮮では総督府の庇護の下に

思うままに調査が出来たのである。たとえば、日本の古墳は明治国家の天皇と関係があったため考古学者が存分に発掘調査を行うことが出来なかった。要するに、植民地朝鮮は日本考古学の実験場となった。帝国大学の学者たちは、西欧で学んだ近代的な学問を試すチャンスを朝鮮に求めたのである。ところが植民地権力側の意図とは別にして、その学者たちの研究は朝鮮の人々にも伝えられ、朝鮮のモノが価値ある文化財であることを認識させた。さらに現在の韓国の文化財の美を考えると、彼らの研究は大きく影響を与えていると思われる。その一方、古代の歴史を照射するのに重要な手がかりを得られる文化財が、日本との親近性と朝鮮の停滞性を強調するために利用された。また、調査の結果が世に出回ることによって、朝鮮文化財の盗掘や乱獲を招いた。そこに日本人学者の功過か問われるとともに、韓国の近代における歴史の歪曲と隠滅が潜んでいる。まさに、植民地期には朝鮮の近代、いわば「歪んだ近代」が進んできたのである。

(5) 調査地・文書館建物などの写真

(写真1) 旧朝鮮総督府博物館慶州分館



(写真2) 景福宮に残っている石造文化財



(写真3) 復元された景福宮

